

河村 静香（かわむら・しずか）

1、プロフィール

俳人。風土作家加藤憲曠、人間探求派加藤楸邨、森澄雄に師事。また、地元では「青年俳句」「北鈴」を経て「薫風」の幹部として県俳壇に貢献。第 32 回角川俳句賞受賞。

<生没>

1934(昭和9)年3月18日～2005(平成17)年4月3日

<代表作>

第一句集『加餐』(平成4)第二句集『庸庸』(平成11)

遺句集『富貴草』(平成18)

<青森との関わり>

青森県八戸市に生まれ、国立八戸療養所入所中に加藤憲曠に俳句入門。青森県芸術報奨受賞。八戸市文化賞受賞。

2、作家解説

青森県八戸市南郷区市野沢(当時は三戸郡中沢村)生まれ。昭和27年18歳、国立八戸療養所に入所加療中の時に、加藤憲曠に俳句入門。29年、上村忠郎の同人誌「青年俳句」創刊に参加し、忠郎や寺山修司たちと競う。30年加藤楸邨主宰の「寒雷」に入会、人間性を詠むことを教わる。31年結婚し、子育てが一段落するまで俳句を中断するが、その後は「寒雷」「北鈴」に投句を続けながらブティックを経営。51年「杉」に入会して森澄雄に師事。59年加藤憲曠の「薫風」の創刊同人となる。61年東北、北海道の女性で初めての角川俳句賞を受賞する。十三湖方面吟行の作品を主体に「海鳴り」と題してまとめた50句である。野沢しの武ら、四人会のメンバーとして研鑽を積んだ成果という。〈寒波来る硝子積まれて海の色〉〈山葡萄の汁を吸ひたる車酔ひ〉〈笛吹きの子は笛吹きに船祭〉などの句が、写実性と美的感覚が織り込められていると、能村登四郎、細見綾子、金子兜太

等、選考委員の高い評価を得た。この受賞後6年を経て平成4年に第一句集『加餐』が編まれる。〈夫遠し星蒼蒼と吾が裸身〉〈梨切って舟のかたちを三人子に〉〈喪の飯のすこし固めや夕桜〉と、夫や子供、祖母の死など、家族を詠んでみずみずしい独特の詩情がある。また季語の取り合わせが絶妙である。人間探求派で育まれた素養に、様々な場で研鑽を積んだものが花開いたのであろう。その7年後の11年に第二句集『庸庸』を上梓。〈明け易し亡き娘が夢に来て甘ゆ〉33歳の若さで世を去った娘の三回忌に、供養のために出された句集であった。17年、「薫風」の九州吟行から帰ってすぐ倒れ、そのまま帰らぬ人となる。夫君の富治氏が翌18年、遺句集『富貴草』を刊行。

3、資料紹介

○第一句集『加餐』

図書

1992(平成4)年9月

200 mm × 130 mm

角川俳句賞受賞を記念し第一句集『加餐』発行。「青年俳句」主宰上村忠郎や寺山修司らと競った時代の作品も収録されている。

○第二句集『庸庸』

図書

1999(平成11)年8月

200 mm × 130 mm

亡き娘への鎮魂の句集。平成5年から10年にかけての詠句、計355句を収録している。